



◎ 王九齡氏談片

王九齡氏ハ雲南ノ志士ニシテ曾テ日本ニ留學シ爾來雲南ニ

十月十五日



在テ時局ノ為ニ盡瘁シ昨年病氣治療ノ為ニ再ビ我國ニ來リ
漸ク平癒シテ近ク將ニ歸國セントシ告別ノ為ニ予ヲ訪ネル時ノ
談片ナリ氏ハ稀ナル篤實ノ士ニシテ其談話モ頗ル有益ナルモノ
因テ謄寫シテ同人ノ參考ニ資ス

予ハ豫テヨリ雲南ニ於ケル對外ノ實情ヲ御話ニ致シタク思ヒシガ
今告別ニ際シ幸ニ貴問ヲ承ケタレバ聊カ平常ノ所見ヲ陳ブベシ
御承知ノ如ク雲南ハ英佛關係最モ大ニシテ就中英國ガ支那
ニ對スル畫策ハ思慮遠大ニシテ其行動容易ニ揣摩シ易カ
ラサルモノアリ元來予カ郷里ハ彼ノ問題タリシ片馬地方ニ接近
シ又曾テソノ附近ニ地方官吏トナリ居リシヲ以テ彼等ノ行動ヲ觀察
スルノ便ヲ得タリ 初メ片馬ノ事起ルヤ我等支那人間ノ觀察ニテ
ハ英國ノ行為ヲ以テ西藏ニ達スル捷徑ヲ得ンガ為メナリト思ヘリ然レ
共是レ甚キ迂見ナリシ英ノ鐵道ハ既ニ印度ヨリ西藏ニ近ケリ

ナング更ニ山道險阻ノ地ヲ擇フ事ヲナサンヤ抑モ雲南ノ地ハ支那本
部中ノ最高地ニシテ此形勝ヲ利セバ優ニ四方ニ經營スルニ足ルベキ所謂天
賦ノ地ナリ英人ノ用意蓋シ茲ニ存在セシナリ

而シテ雲南ハ一般ニ佛教及回教ヲ信スル者多ク就中回教徒ハ最モ
猛烈ニシテ彼等ハソノ關係上殊ニ印度人ト聯絡セリ曾テ咸豐年
間ニ於テ雲南ニ回教ノ乱起リ十八年ノ久シキニ及リシガ長髮賊ノ乱
ニ際セルヲ以テ支那政府ハ奈何トモナス能ハズ此ノ間ニ於テ彼等ハ
屢々印度ノ回教ト通ジタリ斯クニ漸クニ平ゾニ至リ其ノ乱民ノ主ナ
ルモノハ印度ニ向テ逃レタリ故ニ今日ニ至ルモ雲南人ト印度人ト間ニハ
一種ノ聯絡ヲ有セリ第一革命ノ際宋放仁等ハ先ツ雲南回教ト氣脈ヲ
通セリ又羅佩金等緬甸ニ於ケル勢力等ハ中々根底アル者ナリ如上ノ
情形ニヨリ雲南回教ナル者ハ各方面ニ向ツテ關係甚ナカラズ殊ニ
印度ニ於ケル關係ハ最モ英人ノ顧慮スルトコロニシテ如シ一端雲南ノカ

宗教ヲ介シテ印度ト聯絡セバ由々キ大事ニ至ラントハ一日モソノ念ヲ去
ル能ハサル所ニシテ從テ之ヲ壓迫セントスルハ又自然ノ情ナリ是ニヨツテ
觀察セバ片馬事件ノ如キモ自カラ其消息ヲ知ラルベク徒ラニ西藏ニ
捷徑ヲ得ルニ止マルニアラザリシハ明瞭ナリシ

滇緬鐵道 此計劃ハ緬甸ヨリ騰越ノ古里カニ出テ雲南省城ニ達
スル即チ雲南緬甸線ナルモ更ニ之ヲ四川ニ延長シテ以テ揚子江上
游ニ據リ長江一帯ノ勢力ヲ維持セントスル為メニ畫出セラレタルモノニ
テソノ雄圖遠大ナル想像ノ外ニアリ

滇緬鐵路ノ事一度雲南人ノ知ルトコロトナルヤ一省人民盡ク奮
起シテ之ヲ爭ヒ其狀甚タ猛烈ヲ極メタリレカバ時ノ官憲及ビ英
人等ハ大ニ狼狽シ其事遂ニ中止スルニ至レリ然ルニ一方佛ニ于スル
滇越鐵道ハ人民ノ知ラサル間ニ佛人ト政府ノ間ニ調印ヲ終リタル後ニ
發覺セシカバ一時省民大沸騰ヲ生ジ之ガ為メセ府嶺山條約ヲ

スル雲南ニ於ケル嶺山林權ヲ奪回スル事ヲ得タリ

斯カル干係上雲南人民ハ常ニ對外思想ヲ養成セラレ我等始メテ曰
本ニ留學セルモノハ常ニ是等政治問題ニ熱中シ學業ヲ修ムル事

サハ能ハヌ有様ナリシ 雲南革命ノ主唱者ハ楊振鴻ト云フ人ニテ同

ジク日本留學生ナリ彼ハ雲南ニ歸リ後新騰越社ヲ興シ其後西日本
河道隘官之逃於日本雲南河口革命之彼在日軍先開雲南獨立大會
ニ遊ビ歸國後大ニ時事ヲ奔走セシカ英國領事ヨリ支那山官憲ニ
因河革命清政府有借法兵平亂之說也後潛行赴滇運籌革命
密告セシガ為メ危難身ニ逼リ白晝ハ潜伏シ夜間歩行シタルヨリ雲

南名物ノ瘴癘ノ氣ニ觸レ遂ニ永昌ト云フ地ニテ病死セリ當時予ハ
之ヲ見舞ハシ為メ其地ニ赴キシガ已ニ絶命ノ後ナリシ雲南人ハ之ヲ志
士ノ魁トシテ某公園外ニ銅像ヲ建テ紀念トセリフノ揚振鴻ハ李根
源ト莫逆ノ間柄ナリシガ揚死ハ全ク英人ノ陰謀ニ出テシヨリ深ク
之ヲ恨ミ第一革命ノ成功スルヤ李根源ハ直チニ部下ヲ率テ英國領
事館ニ赴キ平常英人ノ手足トナリ居ル支那人ヲ多教殺戮シテ



華欣事左在聞之潛逃緬甸

鬱憤ヲ晴セリ、當時蔡鐸ハ李、舉動ニ少ナカラズ、迷惑シ我等ニ向テ
ソノ無謀ノ行為ヲ非難シタル事アリシガ、雲南人ガ對外人ノ惡感
ハ大トナク、皆斯ル類ナリ、初メ英國領事ニ「リットルト」稱スル者
アリ、性質剛毅ニシテ自信ノ念強ク、多年騰越（雲南地ニシテ緬甸ニ
接近セシ處）ニ滞在シ、雲南各所ノ土語、一トシテ通セサルナク、ソノ手腕
大ナルモ、アリレガ、遂ニ任地ニ客死セリ、彼ノ臨終ノ状、コソ曰醒レキモノ
アリ、彼ハ感覺ヲ失シタル腰部ヲ熱湯ニ浸シ、机ニヨツテ公務ノ報告ヲ
書キ終リ、泰然トシテ絶命セリ、當時之ヲ目撃シタルモノ、流石感
歎ヲ禁セザリシト云ヘリ、其後ヲ受ケテ「アオト」呼バ領事來リ、前領
事ノ方針ヲ遵守シテ今日ニ至レリ、

前清時代ニ於ケル在雲南ノ英人ガ支那官吏間ニ於ケル勢力ハ偉
大ナルモノニテ、曾テ自分ノ知人ナリシ某土司ノ如キハ、冤罪ノ為メ七八年
間獄ニ墜ガレタリシガ、英領事ノ一言ニテ直ニ放免サレタル事、實アリ、

以上有様ニテ、英人ガ清朝官吏ヲ已ノ手中ノモノトナシ置タハソノ政策
推行上最モ便利ナリ、之ニ反シ志キ奮起雲南獨立等ハ、彼等ニトリ
テ大ナル禁物トス、故ニ革命運動ニ對シテ初ヨリ陰ニ陽ニソノ妨害ヲ試
ミタリ、

以上ハ雲南ガ外國ニ關スル實情ナリ、斯ル次第ナレバ、雲南ニ於ケル革
命ハ、他省ト稍ソノ趣キヲ異ニシテ、ソノ起因スル所ハ、寧ロ對内ヨリモ
對外ニ存シ、對外思想ニヨツテ革命ヲ激成セシト云モ、過當ニアラサルマ
シ、目下雲南ノ情况ハ、畧ホ日本ニ諒セラレタリ、要スルニ唐繼堯ヲ首メ
トシ、新進ナル青年ニヨツテ組織セラレ、又彼等ハ多ク日本留學生ナ
ルヲ以テ、善ク日本ヲ了解セリ、若シ幸ニ順調ニ向ヒ、雲貴一角地ニ日
支提携ヲ實現セシメ、藉テ全國ニ及ボシ得シカ、實ニ吾人ノ幸福ナ
リ、
王又曰ク、支那ノ事ハ已ニ御承知ノ如クナレバ、今更ニ多辯ヲ要セズ、予

輩自國人ト雖モ實ニ慨嘆ノ餘リ往々同國人ニ向ッテ憤激ノ語ヲ發シ
 極論痛罵スル為ニ徒ラニ惡感ヲ買フ事アリ況ンヤ貴國人ヨリ見ク
 ル吾國ハ如何ニ不甲斐ナク思ハルハ是非モナキ事ナリ予カ知レル日本
 人ニモ吾國ヲ憂慮シ失望悲觀ノ餘ク支那ハ到底救フベカラサル運
 命ナリ支那人ハ到底提携スベキ人種ニ非ズ等ノ語ハ屢々テリス
 ルトコロナリ是レ固ヨリ同洲ニ對スル熱情ノ結果ナルベキモ吾人ハ是ニ
 對シテ尚切ナル願アリソレハ貴國人ガ暫ク心ヲ持チ易ヘテ辟言ハハ
 大人カ小兒ヲ視ルノ如キ念ニテ我等支那人ヲ待遇セラレン事是ナリ
 予ハ現ニ一人ノ子ヲ持チテ随分無知ナルニ困ッ居レリ然レ共己ノ子ナレハ
 止ムヲ得ズ惟ダ之ヲ善ク導キ放ユルニ斯クテ成長セバ自ラ理解
 スル域ニモ達シ亦恩ニ感ズル時モ來ルヘシト已レノ子ニ對シテ觀念
 日本ガ支那ニ對スル情態ハ恰モカル關係ノモノト心ニ竊ニ感スル事
 アリ日本ハ支那ヲ同等能力ト知リ思ヘバ腹立ツ事モアルベシ惟子
 命

供ヲ養育シ考ヘテ持イテ氣長ニ古話ヲ加ヘラレナバ何時カ支那
 モ發達スル時ニ至ルベク隨テ日本ノ厚誼ヲ感ズルノ情モ起ルベシト
 信ズ

予ハ何ノ幸カ貴國人ノ知遇ヲ忝レレサシモ困難セシ脚部ノ病モ治療
 保養宜シキヲ得シ為メ殆ト平癒ニ近ツキ今日ニテハ脚ノ癒シ而已
 ナラス、全身ニ涉リテ以前ヨリモ健康トナリシ如ク感ズ、今ヤ再ビ
 國ニ歸ツテ國事ニ奔走スル事ヲ得ルハ、全ク貴國人ノ厚キ賜ニヨルモ
 ノナル事ヲ信ズ

我カ國目下ノ情況ハ南北紛争ト云ヒ妥協問題ト云ヒ執レシレ
 テモ内部問題ナリソレヨリモ最モ注意ヲ要スベキハ歐洲講
 和後ノ英佛諸外國ガ對支ノ行動ナリ彼等ノ運動ニテ二度
 其幕ノ開カレンカ首ニ先ツ影響ヲ受クル者ハ我カ雲南ナリ
 予ハ是ヨリ急キ雲南ニ歸リ大ニ國人ヲ警戒シ山成ニ安ンセ

ズ小利ニ奔ラズ、日本ノ真意ヲ同人間ニ徹底セシメテ、及ハス作ラ
大計ニ向テ微カヲ盡シタキ所存ナリ。
別レニ臨ンテ貴下ガ貴國ニ於ケル數多人格ノ士ヲ紹介セラレタ
ル事ヲ中心ヨリ感謝ス云々。



一及
 古トナセシ
 書院
 新
 書院
 之
 関セシ
 要書
 十
 2
 1-2





此書ノ主者ハ菅田村ハシヲ執力ヲ疎ニシテ

善隣書院

ハ一及古トナス

昭和十四年十月廿七日 院長遠記

約考ノ於年之歲月

ヲ維持シ來ルハ己

ク同人協心一致

努力ノ賜ナリ然

ル共此後以狀態

ニヨリテ推行セんとス

ハソハ却テ無謀ナ

ルハ若シ幸ニ世

上者人ト志ヲ同



上考人、志ヲ固

スル、有力家アリテ

一種特色ヨ有

スル、學子金ニ

興味ヲ有シ

廢校ヲ惜ム

ベシトシテ之ヲ後

援スル人ヲラバ

継續スルモノナリ

一継後、際ハは其、如ク

正規、支那語ヲ主トシ

一 継後、際ハ、後、其、如、

正規、支那語、主トシ

其、向、文、學、子、趣

味、ヲ、了、解、ス、様、々

カ、ム、ベ、シ

一 従、来、ノ、教、職、員、

ハ、餘、リ、ニ、義、務、奉

公、的、ナ、リ、殊、ニ、支、那、教

師、ニ、對、シ、テ、ハ、寧、日

其、ノ、數、ヲ、減、じ、一、名、員

換、時、向、ヲ、増、加、シ、テ

報、酬、ニ、優、ナ、ラ、シ、ム、ベ、シ

一 寄、宿、舎、ハ、従、来

ニ、鑑、ミ、設、置、ス、ル、也、ナ、リ

ヲ、可、ト、ス

一 寄宥舎、從來

：鑑、設置也、

可トス

一 廢枝、際ハ

先帝神位、鎮海

觀音假堂内、遷

在中心上、他日本

堂成、也、尋常

：古、也、スベシ

一 先帝猪狩御所用、

一 松木、

明治神宮、奉

納スベシ

七百町可スベシ

先帝猪狩御使用
一松木

明治神宮奉

納スベシ

一書物藉、通

當場所、託

之保管セヨスベシ

一校舎及所屋

家屋、相當

賣買ノ下ニシテ
甚

金額ヲ以テ鎮

海嶺音堂所屬

此ヲ建設スベシ

キ者年考

一 校舎及河原

家屋に相當に

費を以てし其

金額を以て鎮

海嶽を建設する

に於て建設スべ

キ者年修養良

場ニ要するに費ノ

一割を充てしむ

適法ナリト思惟ス

一中島之生ハ

安東家嗣系

男

岩崎 久弥

弥七郎氏嗣系

池田 成彬

目黒 友一

小倉 正恒

寺西 氏嗣系

男

大倉 喜七郎

喜八郎氏嗣系

並稱中興之臣。切業名望。夙
冠一世。令數賢皆已長逝。侍
相齡垂八旬。而復遭過此開
闢未有之奇變。意者天其
有待於巨手乎。自非侍相至
誠大勇。固未易了此局也。庶幾
侍相終勉晚節焉。予一介書
生。不遑濟事。令視同洲之厄。
不勝憂恚。乃特馳一書告以
區區之衷。非侍相不以望也。時
局如此。不一及私忱。惟侍相幸
察焉。明治三十三年七月七
日。日本東京宇島大八頓首。

小田切富弼閣下東洋之事至於此吾人
只有慨嘆然非詳此亞細亞之事竟

裕欽差老伯大人閣下日前
謁左右慰諭勤勉並
且賜教寄生為文一篇辭意
殷懇推引甚重成老伯存
心兩國之交雖鎖事無^事忽^事若
抑亦君子所^以誘導後進顧撫
愛^之一出于誠者也以尋常之士遇此且必
感激之不盡^引始^與長^有夙^者盟^命
志^存此者拍詢^函亦^其無^不默^契哉^長石
川在來月^初旬回粵^為文^刻成^携示^與學^子
堂^生益^有獎^勵也^宋君^在伊^香遊^歸也^南
三向矣頃以高文函寄且^中稟^知日^南
山中多閒日應日夕披折而欣然樂讀將
故人高義且嘉^嘉善^獲君子之心也^敬
粗柔一函敬獻侍者^南向以物見退^又
天尚熱切祈道仰安康即頌
欽差老伯大人平安

昨日、戦鬪ハ音軍（不可志ノ）未村、苦戦ナリシ

初日、（将、張明好マシントスルヤ）遊軍張公、事ヲ以テ参加スル能ハズ

右翼、青柳ハ十分遅刻、音ノ報ニ來リ

依テ予、直中、遊軍ヲ本五先鋒ニ命ジ

暫ク代テ戦綫ニ立テ予ハ自カラ中軍ノ幸

ヲ研究科、直向ニ突出セリ、戦（闘）一州河餘



未^軍之^兵鋒奮^ハ闕^ル頗^シ勉^ム而^モ奮^ニ戰^ス
 斗^ハ劇^ク利^キナ^リ乃^チ平^ク曲^ク對^シ闕^ル尤^モ因^リ難^シ
 簡^シ而^シ時^刻刻^ハ非^シ也^ト
 右^ノ當^ル遂^ニ來^リ會^ス而^シ而^シ方^面
 敵^ハ多^ク大^ク勢^ヲ以^テ襲^リ到^ル勢^ハ
 前^ニ頃^ニ至^ル是^ニ於^テ

總^ノ敵^ノ勢^ヲ

方^ニ余^ハ備^メ敵^ヲ抜^ク之^ヲ赴^ク而^シ得^ル
 尚^ホ一^ニ漢^ノ其^ノ望^ヲ右^ノ軍^ノ後^ニ
 屬^ス也^ト一^ニ年^ノ思^フ而^シ奮^ス
 而^シ自^ラ申^シ村^ノ敵^ノ向^テ
 其^ノ力^ヲ注^ス我^ノ軍^ノ
 戰^ハ心^ヲ陣^ノ也^ト

午後八時前十時に於て忽ち突如として一匹飛
報の連注揚通の鳥曰右の鳥は年十八竟此の戦
闘は各がセカルに於て以テモ此に於て僅か
に維持に来ん本陣の要が動揺せじ
然れども乘今迄觀望せし敵軍の遂に
到達カヲ以テ退却の始に我軍は是を面

ノ要氣ノ道若くは是に脱ヒタリ

皆之悲本愴ノ玉リナリ是に於て

予九離此如此立此其亦之得を

大此存ナレ敷コ通地

以實ナリ

昔ノ敗軍ハ元

予ノ不道

精銳

内ニ来

然レ尤モ一ハ

漸ク其日

有以

以

テ其カノ援助トセシテ是レ因テ大敗一天

原因ノ一ハ是レ最モ予ノ遺憾トシテ不道禁所

ナリシ然レ猶モ慰ヲ藉スル者ハ幼年ノカキ氣氣ナリ成

物年等ハ非常ノ毒城ノ以テ今日ノ毒

一陰少怒ノ敗軍ハ物ラ不方ハ部軍ヨシテ

8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8

貞亮歴生研究の甚しき南唐の考へ
リ月ハ我家の學問の建也 祖先の年士
道ヨリテ成立せし家風ハ實ハ此文武
而道ヲ勵ミシハ其を以テ殊ニ漢學
ハ祖又一孰ハ人父漢學ハ人日取モ研
鑽リシハモリニテ予ノ友那尚子モ全
父ノ志ヲ継キタシモリテ若シ其旨ニ相
違ハ唐使コノ瘖ニ至ヘリ是レ誠ニ深
存スレバニミテ予ハ幸ニ友那ノ方碩
儒廉卿先セシ如ク人ハ存ヤラニ時ハ幸ニ
テ尚子出テ七年其の間下、留マリシガ

父初テ志ヲ成ラシムル得タレモ
ニ至リテハ余ヲ漢亂ノ時トナリテハ
天地開賢人應ノ時ニシテ友那ノ留學ス
ルニ其師ナリ其學問ヲ求ルニ道ナキ有
得ヤリ之コト思ハバ予ハ留學ノ後、向
一別々ニ校ハシテ予ハ其師ト申
死トシテ曰ク兩國ノ戦争ナク其
存ハ亦乱亂出テ道ハ存リテ出
最卑人カ、如何トモニシテ玉トシ
吾等ハ初テ志ヲ成ラバ先ツ弟一、我國
國語ヲ先ニ
漢法亂興廢ノ理由ヲ察シ



先家君栗香大人詩集

前五卷ハ已刊

後三卷ハ序文中有吉松後

三傑公題字ハ是ハ雕刻師作

東画 一主シ其ハ了アリ

及一巻ハ本刻ヨリ

是ノ集ハ序文題字等ハ木板

ヨリ用ヒ而集ハ矢張流字ヨリ

カニ

三條公大前ニ字 已刻

木子鴻章氏序 已刻

松平左馬氏序 已刻

張彦所氏序 已刻

松平春嶽公序 未刻

有栖川宮様忠厚二字

ハ題字(未刻)

續集ハ日後集

針久氏序(未刻)

栗香公之篇、詩ハ天才ト確證ト兼ニ云
ハ者ニシテ邦人ニ實ハ見ハ希シク好詩
多シ前集ハ是者ハ世ハ已ハ本村喜兵衛
ハ雕刻シテ其功ヲ完スリ今マ家ハ此ニ多
新木板是ナリ

新刊物

是也先教即存向中

三集の布文教葉の第一卷上ケハ
彫刻のりりしもりし是は尚の事自書に
凡今日此通の後彫刻を了るに其用を
大方に安し且り木板の道中要に
も是が空のりりしは
字序支支ケヨ木板上
ハル者スルガ直にト思フ
和字者必其布に前集の
ハル者ハ其布に前集の
ハル者ハ其布に前集の
ハル者ハ其布に前集の

忠存、二字の使名伊勢任
福、情を夕にモリナリ是の
是、其の在り作存、別々の
侍、此集の安、知、精、華、
是、此集の安、知、精、華、

我家中書類ニ實ニ國家を多し就
 中歴史初正治位口抄先成
 筆礼ノ白皇字其義起源ノ如キハ
 實ニ我邦國體ノ古本ナリ祝詞
 右ハ白帝國家ナリ一都ハ清書
 一都ハ皇室ノ納メ一部ハ善隣書
 院ノ一部ハ山家ノ藏スベシ
 然其斯ノ如キ書類ハ可成世ノ志アル
 人ト示シ置クニ二三知己協力セラ
 刊行スルモ宜シカレバキカ 刊行シテ已利
 國史志起源ト一部ノナシ置キヨシハ先
 大人ノ遺志ナリシ

... 丁午ノ積年ノ希望

遊字序文順序ノ序

一有栖川威仁親王 忠厚

一三條實美公 大雅

一 李游老中位

一 黎庶自心集 序

一 張廉卿先生 序

一 升允吉甫氏 序

一 松平春嶽公 是為... 集

一 例... 廣果寺尾ノ附入丁

御裁言... 己

...

定て、想ハハカラス

予ハ學向初ク、一木貴任、有る、拘ラ
不此知、之、之、所、而、急務、備
視ス、忍、心、力、持、的、奔、走
心、力、分、之、為、一、方、學、問、忽
カセ、し、ら、ハ、**自然**、已、ハ、**教**、ニ、シ、テ



好リ窮め、こゝろ疾し居たり、汝が斯
に女鬼モナケレハ、専ら學業に任じ
乃て神に心かゝらズ
學業、備案者、人書り、款の整
理スル如キ、家の學、滿澤ヨ身
一古、母コトナリト、知んべし

何んを以て書

か今日世界、立ッテ、コノ國ヲ持シ、行ノ道
殊、日本人士、勉ムベキ職方責任ヲ明

カニスルヲ、忽カセミスヘカラズ

是レヨリハ、私日本モ、私情、多事トシ、ズク人
、侍るコト、随テ甚カ、繁ク、珍難スル、勢トナ
ルハ、自然ナリ、然レ共、凡テ、コト、由方ハ、ヨリ行
カヌ者ナリ、貞亮、學問ニ志カセハ、専心

身ヲ學問ニ委テ 潛心シテ 鴻意ヲ求
メ 斯業ヲ以テ 自他ノ為ニシテ 期セシ
心カラズ 政子外 支其代ニツクテ 奔走
スル 國ヨリ 志チ 職分ナルモ 人ノ名ヨリ 天
性ト長厚トシ 亦多ク 各自ノ責任ヲ考
ヘカニカラズ 曾 文正公(名國藩)ノ 大才
能ノ人トシ 一國ノ 大宰相ト任ジテ 其

故シ孔子ノ之ヲ 弑辱トシテ 殊々 惡シ 蓋
子モ 長未ニ 死テ 明断トシテ 亦 辨明
ト 施サレタリ 予 近代ノ 新法ノ 論
説トシテ 了 辭等ト 殊々 此 似而
非トシ 況ニ 多キト 覺テ 是等ハ 自然トシ
無所ノ 責アリト 悟シ 楷 端トシテ 其

難徳ヨ後ハ、ツラテモ 最モ記意
七加ハカラズ

我家ニ社ニ以テ年ノ日記 殊ニ 栗香大
人ノ日記及書類 維新前後、於テハ自
國ノ一古蹟存ルニ 吾等ナリ 汝等
史、長クテハ 我家ニ 斯ノ如キ國

ノスベラ、以テ已ニ性トシテ大功績、立テシ人ナリカ
ソノ學問又藝又偉大ナルモノニシテ 諸君孔明以
後、一人トシテ我賞リタル人ナリ 我師張廉
所クモ、常ニ正門下、随一高ヨリ弟トアリ
セラレタル人ナリカ 自カラ、己レノ性分ヲ察シ
又正公ノ學問ハ 學ビ得ラレトモ 其事業ハ 全
クスベカラズト 思惟サレテ 遂ニ 一世仕官ノ念

日絶々文學ニ専ラ心注フカシテ遂ニ大成
マシメ即晩期ノ願儒トシテ純乎シ
道徳ヲ傳ベキ人トナラシムナリ 汝ハ性
分トシテ事業ノ人トシテ學問ノ方ハ
成立ル所ニアレト思ハシヨリ斯ノ要ヨリ
思ヒテ已ニ學問ヲ以テ身ヲ立ツルニ志シ

一 意心平氣、安ん

じ、得向ら安んは走ら、良
法なし他人が己、好意
と、諾は謙徳之賜
ナリ

一人、師に好む勿し

師者、就し者ハ此名
氣先かし難し而かし識
者より之、観る極み見

トシカモ虚驕ノ氣ヲ帯ルカシ

一 速断 觀察ノ忘

始ニ審カシシ終ニ考ヘ因リ批シ果ヲ
察シ苦心ヲ勢ニ趨向ノ弊ハ
快シク速断ニ慮シテ
徳速断ニ慮シテ

親切ノ講ニ勉メテ
ムベカラズ
義道ナリ

一 齊而道情 君子差之ト云フ

了詩：衣錦尚絀ト云々中庸
君子之道闇然トシテ日ニ
音早ラカ
小人之道の然トシテ日ニ亡バ
君子
盛徳侯親如忠
ト云フ

味アハ哉言也 是皆由名_ヲ避_{ケテ}德
道_ヲ利_ス ^ミ _ル 兼_テ 之_ヲ忘_ル 虚_カ 名_ヲ 如_ク 此_レ 可_レ 不_レ 憚_ル 哉
一 博_ク 庸_ク、二 者_ハ、聖_賢 大_ニ 道
此_レ 書_ニ 述_ス、今_ニ 臨_ス 別_ニ 是_レ 冊_ヲ、贈_ル
一 庶_カ 哉、日_々 持_テ 讀_ム 自_ラ 然_ル

世見通_ス、一_ノ 日_ニ ア_ル ベシ

大正二年二月廿七日

信与大八識

重刊詩古微序

漢書藝文志云漢興魯申公為詩訓故而齊
轅固燕韓生皆為之傳或取春秋采雜說咸非
其本義與不得已魯曾為近之三家皆列於學官
又有毛公之學自謂子夏所傳而河間獻王好
之未得立夫劉向班固親見四家之書獨稱魯為
近而於毛亦有微辭知其進退非偶然矣自斯厥
後古文家之說行今文家日以衰微蓋不獨詩為
然豈後出者果勝于前抑淺深之有間耶嗟乎漢之
勤搜博采三家並立博士各守家法不敢踰越後世俗
學徧天下安其所習毀所不見衆力之所趨資育不能
障之遂使先聖之微言大義不傳於代天耶人耶有妮

古之士綴輯於散佚之餘若宋之王伯厚國朝之范家
相徐璣皆三家功臣然齊魯詩最先亡遺說僅有存
者韓詩雖有稱引亦詁訓為多隻義單辭固難貫穿
周決張三家之跡而与毛詩並行最後乃得魏先生默深
詩古微張皇幽眇歸之大道向之棄之如遺噤不敢出口
者至此大聲疾呼曠若發蒙蓋二千年之絕學天寶
啓之非衛足言也先生嘗謂西京微言大義之學墜
于東京東京典章制度之學絕于隋唐兩漢故訓聲音
之學熄于魏晉今日故訓聲音以進于東漢典章
制度此齊一變至魯也由典章制度以進于西漢微
言大義此魯一變至道也知言哉知言哉乙酉秋宜
都楊守敬

今茲己亥。四月庚戌。故彥根藩老職黃石岡本先生小祥忌辰。令孫宣美宣成。修祭於大谿山豪德蘭若之塋域。香苗亦展拜。越五日既望甲寅。門人故舊胥謀。以儒門之儀禮。祭先生之靈於彥根樂々園。謹賦長句四韻八章。以代蒞藻之奠。情見于辭。

花落鶯啼已一年。音容在目淚潸然。曾匡社稷身濱殆。更遇滄桑跡屢遷。門柳園松元亮宅。林風湖月子皮船。人間誰復諒心事。知己海舟還九泉。

家世韜鈴仕大侯。早年選擢繼箕裘。虛襟夙有降賢譽。參幄寧遺藉箸籌。須做下宮存趙祀。不希博浪報韓讎。論將治亂排輕舉。也是生難死易秋。

天降嚴譴鎖門墉。寂莫湖城晚浪春。裂頸何人訴冤枉。拔茅有士薦登庸。東山絲竹謝安宴。北寺鑽鈇晁錯蹤。樽俎折衝三寸舌。廟謀中輟不移封。

駟職小戎留帝京。深愁鼎鼐不和羹。緋袍禦敵宮門役。朱扇麾兵飽國營。安藝古作飽國見某雪沒潢池越山險。烏啼帳幕灑江平。據鞍欲贊中興業。建旆從征北勢城。

茅屋石田芹水莊。決然歸臥逐知章。蠡湖波暖群魚躍。瞻岳雲晴獨鶴翔。已棄釜鍾如土芥。豈將蓑笠換冠裳。先生辭請看南面稱孤處。詩酒乾坤鷗鷺鄉。

凜然赤幟樹吟壇。又作中原逐鹿看。七道山河我征遍。兩京壘壁敵摧難。瓣香畢世杜工部。舉案同行梁伯鸞。正始無音風格靡。擬將隻手挽狂瀾。

何止梁門衣鉢傳。風騷奕代有淵泉。文章氣節壘篔簹。翰墨丹青祖考賢。聞說蓼莪同雪案。况還棣萼屬瓜綿。六松園集靜區集。陶冶性靈詩幾編。

先生本姓津木氏。彥根藩世臣。乃祖久徵。字明卿。號超山。能文善畫。乃翁久純字德卿。號昆岳。詩極雄渾。有六松園集。清鮑秋吟作序。既刊布世。伯兄泰交字素之。龍臺。風流益著。仲兄峻字東昱。號靜區。嗜武好學。周游四方。死大鹽後。素之亂有遺稿。刊行于世。先子蕉齋府君。皆辱文字之交。同胞兄宜猷。字公養。號為先生。嗣先善于詩。

談笑宵前侍絳帷。溘焉何料賦騎箕。壽期百歲氣逾壯。集梓六篇名益馳。咫尺獻詩陪玉坐。平生好客足珠藜。九重恩賻榮哀極。深刻今將勒大碑。

門末 竹泉 橫田香苗肅拜



布衣臣宮第大八齋戒沐浴上書

皇帝陛下臣為非職宮內有爵位局主事官島誠一

郎長子臣年輩猶若學業未成之故不敢拜官職然

臣父誠一郎久列宮內之員蒙優渥恩命祿澤潤明

感激之餘常教臣等以忠義報國之分未嘗或怠也

先是臣以明治二十年遊學清國隨湖北人廉卿張

裕釗 道德文章之教八年及今年之春廉卿沒修

學之期未滿仍留在清而適及聞征清之師興起身

歸國所留 為陝西省西安府於清國為西北省

我皇都實在一千三四百里之遠道路隔絕通信不

宮島誠一先生遺稿

10 x 20



傳是以聞知事變最在衆人之後纔以八月廿九日
 去矣將起身也彼國之識臣者皆為臣危道途
 之難勸臣止而不歸且以待事歸平和然臣以為兩
 國之事不幸至此則君父所仇也所俱不戴天也臣
 雖不肖不層託身不俱仇國以免一旦之難也
 是以決意而臣之不幸為彼國人所疑至謂臣久在
 內地者為政府所為也是以網羅俟臣
 幸有天佑遂得免重見父母陛下
 登德所感天地

官局詠士先生遺稿



三年

勇嶽山に因外ニテも道に於て其の辱
ヲ雪ケリ嘉文公ハ大布之衣ヲ割シ
テ身再ビ其國ヲ富強ニセリ苟モ
越ミノ志ヲ以テノ位ヲ行バ四一家
ヲ既時スル山並國難ナランヤ然レ氏
水ノ邊キヲ欲シ一人之ヲ炊ギ十人ニテ
其平ハ事ニ登ラセ故ニ其也此大家ヨ以テ
為事ノ維持ニ欲ヒバ一家ニテ同ノ心
力ニテ勉テスル所ナラハヤカラズ諸民知事

養浩堂

此のいらい知者ハ我々自ノ書境ヲ開カバ
幸ニ好テ諸ノ浪費ヲ省ルノ
明治廿八年五月十八日

この書大ハ
死

疏法公南 公于廣興赴行

九年石達開北湖

十年正月大破賊於北碚 金陵大營潰 陣亡五
萬餘其者降及之公病亟立回德甚力疾率師四援公
刊道先安慶詔加太子太保予騎都尉世宗封天
子行熱河公方受命王定哀詔正病甚劇八月卒
諡亮於武多子印署年五十



善鄰書院原稿用紙

賦呈 詠士夫子

夏書

高濂

楊笑無外誘
 忠孝古風存
 設帳桃李遍
 趨庭蘭桂繁
 曾以明明主席
 不上五侯門
 想見林園夕
 臨晚心筆下奔

No.

十行 二十字詰



齊人齊人楚楚車車王孫賈事齊閔王出走賈失王之處其母曰女朝去而晚來則吾倚門而望。女暮出而不還則吾倚閭而望。女今事王。王出走女不知其處。女尚何歸。
孫賈乃入市中。中曰。淖齒。

齊國殺閔王。欲殺我誅齒者。初。市中人從之者四百人。與誅淖齒。刺而殺之。

此字樣
皆成字

元元

棘榛

短 駢 柔 固 山 有 榛
枳棘之榛

棘花而香不足
蕙一棘一花而香有能者蘭

棘榛之貌
棘榛之貌

穀

過此教誨之不可後也榛殼不墜則... 甄別之不可緩也蓋... 也雍正年間甘肅來以... 事而充翰林入... 樞密官之教誨猶種... 皇超擢壁之甘肅... 日田間乃能熟悉... 內廷行走之員或... 敕人而外大半不... 中而農夫不問教... 外官而不及京旅... 多或十年不得補... 前往任十年不得... 內廷終歲不獲見... 內廷見戶部... 御園本難分... 稿則多及... 官之顧又焉能... 培養甚可惜也... 堂不入直... 內廷者令其日日到署... 情心術長官一周... 甚也大受不特... 見旁考參稽而八... 不痕不考

禾

禾 稷 稷 稷

內廷

籩

明

稊

稊 稊 稊 稊

稊

稊 稊 稊 稊

聖人取法以天下為己任

窮則變 變則通 通則久

窮之時上以天下為

己任 然不取勉未

有善也

通則久 而善去天下

禹禮 窮則變 變則通 通則久

窮之時上以天下為己任 然不取勉未

有善也 窮則變 變則通 通則久

窮之時上以天下為己任 然不取勉未

有善也 窮則變 變則通 通則久

窮之時上以天下為己任 然不取勉未

有善也 窮則變 變則通 通則久

窮則變 變則通 通則久

然而賢者自有其分之所為 此中消息亦不可不知

統一の者白随考了説ヲシテ徒一分
糾。主トシテ昔々者進スハ其レ
概スベキナレバ運ノ振極ノ際ニハ其
異議ト斯カシ現象ヲ現ル者ニテ復シ
己ヨリ得ズト云フ者モ亦ナシ惟要同試テ
任ズル者ハ斯カシモノニ達ハサルハナキ法心
ハ氣ニ必要ナリ

斯カレバ代ノ者トシテ

人心ノ稀薄トテモ云フヤナリ是レ其ノ流トシテ雑誌
學問ノ流トシテ流トシテ人々實
スルハ之ヲ逐ヒテ殊ノ最モ其レハキハ何
何モ道院ノ近キ様ニシテ其矣
甚カク人ノ慢ラヒシハ學名ノ説アリ是
等ハ所謂邪説毒語ト比シテ其
人ノ實ニ道ヲ害スルモノナリ

殊、應より事、故えん、
心、其カ、致し、故、
意セハルベカラズ

支那ハ道統ト稱シテ、
ルテ、今日、至ルモテ、
系統アリテ、無形ノ向、
及那ハ道統ト稱シテ、
ルテ、今日、至ルモテ、
系統アリテ、無形ノ向、

其、真、純、然、
其、真、純、然、

且、ソノ、文、字、ト、
且、ソノ、文、字、ト、

シキモノナリ

フ、外、
フ、外、

種、
種、

ん、
ん、

學、
學、

是、
是、

世、
世、

官、
官、

今、
今、

我、
我、

學、
學、

久不候慚歎字深淺皆自者氣身
邵^其文康勝乃頌不頌他於死等
者與念友人範木誠依氏與弟同紀
又極親善現將居傳滿湖祀密所
鳴氏特往錦北而候出人忠厚且區
大能蘇泥意同洲望音之視之猶
我也必研彼此此是際出數勿以為
能何時為方念為解自學餘不為
乃印頌

翠山先生之遺書

大正六年七月二十日

先帝一週年忌日

弟
重慶大八叔

十四

水好亦朝來法決之氣襲人非不可
掃中庭如日值 先考貴忘辰母才法子携

晴世基考

法表亦上續作前題一詩

欣若適宿緣佛教為新遷 越海心月切開
山常存固扶柔於出日若木藹含煙方

頃波濤上輝帆竟浩然

堯

送德九君五入鎮海

書茂与甲錫氏糾余會談到十所 未聞事
德九君入生印輝 談野次武甲 先自早
可之印也子不談初音子
天牛之治家可之印 廣和肺素心
尋常凡邪可 真天大島心 乃後九子乃開福

善隣書院の剣石と云

有餘り及べり後書り云ハハ

その老も出来國の最度多し用

供と云しタハ老も下賦多敷出り

今後、是ノノ勢力らんモ左シラズ

献る一ノモカカレマシ及ヤ經費ノ蘭

系モアハハ何由領セハハアラズ

今更ニヤモ料ハハカラス但ニ書院ヨ

人國の寶具定ハ貴重タハ何品多

ト殊ハ中央ハ安富トシ人地ノ本ハ

明治ノ帝陛下御下御行ヲ御行

叔トナリクモナハハ國寶定ハ随下

ナセリ石ノ木打ノ遺業ヲ甚カク大

草ノ度多シ代ハ何カシラ石打ノ定

ノ役ケ永ク保存ヲ謀ラハハカラズ